

Title	契約, 接触, コロニー : 『ドラキュラ』の徴候的読み
Author	林, 完枝
Citation	人文研究. 43 卷 8 号, p.661-677.
Issue Date	1991
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部
第43巻 第8分冊1991年91頁～107頁

契約，接触，コロニー —— 『ドラキュラ』の徴候的読み

林 完 枝

I. Bloodsucker/Motherfucker

ブラム・ストーカーの小説『ドラキュラ』の第三章において、ロンドンからはるばるトランシルヴァニアのドラキュラ城までやってきた不動産鑑定士ジョナサン・ハーカーに、城主のドラキュラ伯爵は、かつてバルカンや小アジアにその名を轟かせた彼の家系やトランシルヴァニアの歴史について物語る。十九世紀末になってもおよそ啓蒙の光とは無縁な、異国情緒たっぷりの自然環境と古城を観光目的に開発するための交渉に、ジョナサンは大英帝国の首都からやって来たわけではない。伯爵が買うことになっているロンドンのある土地と建造物の契約を正式にとりまとめるためにやって来たのである。第三章において、伯爵が封建領主としての家名と系譜を語るその饒舌ぶりはやや度をこしているが、1897年以降の一部の読者にとっては文学のドラキュラから史実のドラキュラを読み解くためのひとつの徴となる箇所である。つまり、このゴシック小説のタイトル・ロールに歴史上のモデルがいるのかどうか、ということだ。以下に、その長広舌の一部を引用しよう。ジョナサンも気づいたように、伯爵は royal 'we' で語る。

We Szekelys have a right to be proud, for in our veins flows the blood of many brave races who fought as the lion fights, for lordship. Here, in the whirlpool of European races, the Ugric tribe bore down from Iceland the fighting spirit which Thor and Wodin gave them, which their Berserkers displayed to such fell intent on the seaboard of Europe, aye, and of Asia and Africa, too, till the peoples thought that the were-wolves themselves had

come. Here, too, when they came, they found the Huns, whose warlike fury had swept the earth like a living flame, till the dying peoples held that in their veins ran the blood of those old witches, who, expelled from Scythia, had mated with the devils in the desert. Fools, fools! What devil or what witch was ever so great as Attila, whose blood is in these veins?... we were a conquering race... when the Magyar, the Lombard, the Avar, the Bulgar, or the Turk poured his thousands on our frontiers, we drove them back... when the Hungarian flood swept eastward, the Szekelys were claimed as kindred by the victorious Magyars, and to us for centuries was trusted the guarding of the frontier of Turkeyland.... Who more gladly than we throughout the Four Nations received the "bloody sword," or at its warlike call flocked quicker to the standard of the King? When was redeemed that great shame of my nation, the shame of Cassova, when the flags of Wallach and the Magyar went down beneath the Crescent; who was it but one of my own as a Voivode crossed the Danube and beat the Turk on his own ground! This was a Dracula indeed... who inspired that other of his race who in a later age again and again, though he had to come alone from the bloody field where his troops were being slaughtered, since he knew that he alone could ultimately triumph? They said that he thought only of himself. Bah! what good are peasants without a leader?... when, after the battle of Mohacs, we threw off the Hungarian yoke, we of the Dracula blood were amongst their leaders, for our spirit would not brook that we were not free. Ah, young sir, the Szekelys and the Dracula as their heart's blood, their brains, and their swords—can boast a record that mushroom growths like the Hapsburgs and the Romanoffs can never reach. The warlike days are over. Blood is too precious a thing in these days of dishonourable peace; and the glories of the great races are as a tale that is told. (pp. 28-30) ¹⁾

神話時代から十九世紀末までのバルカン諸国, 諸民族の移動や抗争がここに描かれているだろうか。三つの帝国, すなわちオーストリア=ハンガリー帝国とロシア帝国とトルコ帝国に囲まれ, さらに西側列強の勢力争いにも巻き込まれる多民族の坩堝, 「ヨーロッパの火薬庫」の危機的状況が暗示されているだろうか。ドラキュラ伯爵は自らを「セクリー人」と呼び, 先祖代々勇猛果敢なる封建領主として異教徒と血で血をあらう戦闘をしてきたと語る。貴族としての血統, そして領土や覇権をめぐる王侯貴族同士の流血の戦争, それらは中央集権化された十九世紀末のヨーロッパにおいて時代遅れになってしまったと嘆く。

さて, まずモデルとなった歴史上の人物について語ろう。²⁾ ドラキュラのモデルは, 1430年頃, ヴラド・ドラクル(悪魔公)の第二子としてトランシルヴァニアのシギショアラに生れ, ワラキア公としてバルカンのみならずトルコや西ヨーロッパまで勇名を馳せたヴラド・ツェペシュ(串刺し公)である。人種的にはセクリー人ではなくルーマニア人(ダコ・ロマン)である。「ドラクル」には「竜」とともに「悪魔」の意味がある。ヴラド・ドラクルの世嗣であるから, 指小辞がつき「ドラキュラ」になったという。1453年, トルコ軍によるコンスタンティノープル陥落によって東ローマ帝国が滅亡し, セルビア, ギリシア, ブルガリアもまたスルタンの支配下にはいった時代, オスマンの拡張主義に反対し, 断固とした態度で最前線を戦い抜いたワラキア公ヴラド・ツェペシュは, 反トルコ十字軍における急先鋒, 勇士である。十五世紀のワラキアは西側世界の極東要塞, したがってヨーロッパの「周縁」, 「他者」である。最も血腥く敵と戦ったものは, 味方にとって, ひとたび和平が成立するや敵と同じくらい忌むべきものとなるだろう。野蛮なる異教徒の心胆を寒からしめる, さらに野蛮さ。ヴラド・ツェペシュの外交政策および国内政策は, 当時においてすら徹底的なものであった。「異教徒」・「蛮人」トルコ人のみならず, 「同胞」に対する年齢・性別・身分を問わぬ「虐殺」の風聞ゆえに, ルーマニア人, ハンガリー人, ドイツ系ザクセン人など「キリスト教徒」にとってさえ, 恐怖の治世として伝説化され, 政治的・外交的に利用された。乱世は残虐非道な君主や英雄的軍事戦略の挿話に欠くことはないというわけだ。また, ヴラドはハンガリー幽囚のあいだ(1462-74年)に東方正教会の信仰を棄てローマ・カトリック教に改宗して, ハンガリーのマーチャーシュ王の妹と再婚した。これが政教一体を旨とする当時においてギリシア正教世界の怒りを買うことになる。改宗以前のヴラドが, 国内の

ローマ・カトリック教の修道院を目の敵にしていたことを思い合わせるならばなおさらである。1476年末、ワラキアにおける第三期統治を始めて間もなく、ヴラドはブカレスト付近の戦いで殺害されたという。文字どおりに生血を吸って若返ったとか墓場から蘇ったといった吸血鬼伝説は歴史上の彼とは無関係であるが、たしかに、彼の統治と彼の戦闘は文字どおりに血に塗れていた。その流血は時代背景からすれば何ら特権的な暴虐としては映らない。民間伝承に根づく吸血鬼伝説は、西ヨーロッパ文学の（ことにイギリスのゴシック小説の）吸血鬼とはあまり関係がない。十八世紀末にロマン派がアルプス山脈を「発見」したように、十九世紀末にブラム・ストーカーはカルパチア山脈と「森の彼方の国」トランシルヴァニアを「発見」したのである。

ストーカーの時代、トランシルヴァニアはハンガリーの支配下にあった。つまり、オーストリア=ハンガリー二重帝国の一部であった。第一次世界大戦後ようやくトランシルヴァニアは、ワラキアとモルダヴィアに加わってルーマニアを構成することになる。ストーカーが当時のルーマニア領ではなく、ハンガリー領のトランシルヴァニアを選んだ理由は、その名（「森の彼方」）、地の利（カルパチア山脈）、多民族の坩堝による「オリエンタリズム」ということに加えて、吸血鬼信仰はルーマニアよりまだしもハンガリーになじむということもある。³⁾ それに、ハンガリーには実在の貴族バートリ・エルジェーベトが、若返りのために多数の若い娘たちの生血を絞った実例もある。小説『ドラキュラ』の舞台は主にふたつある。1890年代のイギリス（港町ホイトビーと首都ロンドンとその近郊）と東ヨーロッパ・バルカン（ハンガリー、トランシルヴァニア、ブルガリア）であるが、後者は封建的中世のイメージに色づけられている。小説の始まりに、ジョナサン・ハーカーは海峡を越えて陸路でカルパチア山脈に向かう。彼はドラキュラの奸計にかかり城に閉じ込められるが、行方不明になったあとブダ・ペストで発見され、許婚者ミナがイギリスからやってきて彼を看病し、かの地で結婚してから故国に戻る。一方、ドラキュラはロシアの船「デメテール」号でホイトビーに着き、ついでロンドンに来る。小説の後半で、ドラキュラは「エカテリーナ」号に乗船し、海路でトランシルヴァニアに向かう。これを追いかけるドラキュラ討伐隊のパーティは六人（イギリスの貴族ゴダルミング卿、ロンドンの精神科医セワード、テキサスの百万長者クウィンシー・モリス、不動産鑑定士ジョナサン・ハーカー、アムステルダムのもくろみ医学・哲学・神学の権威であるヴェン・ヘルシング、ハーカーの妻ミナ）であるが、二人ずつ三組がそれぞれ計

画性をもってトランシルヴァニアに向かう。例えば、ハーカーとモリスのペアはチャリング・クロスから出発し、パリ経由でオリエント急行に乗り、ヴァルナ（ブルガリアの港）に着く。事件解決の七年後、ミナは夫とともに再びトランシルヴァニアを訪れ（ジョナサンにとって三度め）、かの地のおよそヨーロッパ的ならざる風光明媚に心うたれる。海路と陸路を往復し、西の文化と東の文化が接触する。十九世紀末、大植民地帝国イギリスが文学のうえで、ヨーロッパの極東に出会う。

イギリス小説はそもそもその「発展史」からして交易や植民地支配ときいてもきれない関係にある。マックス・ヴェーバーを今更もちだすまでもあるまいが、ロビンソン・クルーソーもレミュエル・ガリヴァーも大航海時代以降の大洋に乗り出し、イギリスにとっての未知の国々に漂着しあるいは周遊し、野蛮人や奇形に出会ったのである。⁴⁾しかし、十九世紀末のイギリスはすでに世界地図に書き込まれた土地の至るところに自国の旗を翻していた。インドは勿論のこと、アフリカにも中国にも東南アジアにもアラビア半島にも、太平洋、大西洋の島々にも自国の支配を及ぼしていたのだ。十九世紀の「主流」小説において、われわれは例えば、シャーロット・ブロンテ作品では西インド諸島に、ディケンズ作品ではオーストラリアや中国に、ウィルキー・コリンズ作品ではインドに出会う。これらの異国は物語が進行・展開する主要舞台ではなく、絶対的な非西洋として強調され、あくまで副次的役割しか与えられない。ジェイン・オースティンの『ノーサンガー・アビィ』でヘンリーがキャサリンに言う台詞にも似て、こうした小説家たちは、異常な出来事はイギリスのとりわけ田園では起るはずはなく、都市では異常な事件が起るにしてもその謎は解けるはずであるという信念に支えられているようだ。⁵⁾異国を好んで物語の主要舞台に選んだのは、啓蒙主義とロマン主義の私生児とも呼ぶべきゴシック小説である。イタリア、スペインといったローマ・カトリック文化圏が、異端審問という格好の刺戟的な物語装置を提供することからも特に物語の主要舞台として好まれた。『オトランド城』の時代設定は中世イタリアであり、『ヴァセック』の主人公はアラビアの専制君主である。ジャマイカからイギリスへの帰国の途上で死んだM・G・ルイスは十九才のとき、『修道僧』で悪魔と通じた破戒僧の破滅を描いた。アイルランドの牧師でもあったマチューリンの『放浪者メルモス』では、悪魔に魂を売り渡したファウスト的人物メルモスが、この世の楽園のごときインドの無垢な乙女を墮落させ破滅させる。これは典型的な東洋趣味の現れである。

ざっとイギリス小説史の主流および傍流の小説群を眺めてみても、イギリス作家（とはいえ、かなりのところアイルランド系作家が占めている）は東ヨーロッパやバルカン諸国を、小説の舞台や副次的効果としてあまり利用してこなかった。十九世紀末の大英帝国が東ヨーロッパやバルカンの情勢を気にかけるとしたら、それはますます弱体化しつつあるオスマン帝国の隙を狙って南下するロシア帝国の影響力を牽制する必要性からであり、新興の帝国主義国であるドイツ帝国の動向、とりわけアラビア半島とアフリカ大陸へのドイツの進出を阻止するためである。東ヨーロッパ・バルカンはかつてイギリスの植民地支配の歴史に登場したことがない。それは、文学においてもまたなじみない素材である。ブラム・ストーカー以前に、シュリダン・レ・ファニユが『カーミラ』の舞台にステュリア（オーストリアの州）を選んだことは、したがって特筆に値する。

劇団の大物ヘンリー・アーヴィングのマネージャーでもあったこのダブリン出身の作家の小説『ドラキュラ』は、同時代のイギリスと東ヨーロッパ・バルカンを文明の西側／東側として位置づけ、前者には様々な近代テクノロジーの成果（例えば、電気、電信電話、鉄道網、地下鉄、速記、タイプライター、蓄音機など）⁶⁾、近代の精神医学の知見（シャルコのヒステリー研究）、犯罪学（ノルドー、ロンブローソ）、メスメリズム、観相学、医療設備（精神病院）、医療技術（聴診器、注射器、輸血、麻酔剤）を配分するのだが、後者は中世のゴシック的雰囲気にも包まれるばかりである。森の彼方の国には不死の怪物がいて、狼を手なづけ、蝙蝠に変身したり、煙や霧にも姿を変えて移動したり侵入したりするのだ。この怪物は世界制覇の野望に燃えて手始めにイギリスを選び、文明社会の汚れを知らぬ美女を誘惑し、墮落させる。神話・伝説的な悪の権化は東の未開の国からやってきて、人間世界や文明社会の掟にお構いなく振る舞う。ここには容易に、世紀末イギリス社会の外来者恐怖症の徴候が読み取れる。言うまでもなく、イギリスの植民地主義と経済的繁栄こそが結果的に外来者を自国に招くという側面は、都合よく忘れられているのだ。⁷⁾この世紀末イギリス社会の文脈にはお構いなく、怪物に美女を奪われた男たちは、十字軍の騎士精神でドラキュラ討伐隊を結成し、フォークロアの吸血鬼信仰に学んで対策を練りドラキュラを追いつめる。彼らは近代テクノロジーを利用しながら、しかも神話・伝説の規範と神学の権威を悪魔祓いの拠り所とする。彼らに対するドラキュラ伯爵の捨て台詞は 'Your girls that you all love are mine already; and through them you and

others shall yet be mine—my creatures, to do my bidding and to be my jackals when I want to feed.’ (p. 306)である。彼の世界制覇は自らの血統を誇る貴族出の軍人らしく軍事手段に訴えるものではなく、女の掠奪によるものである。彼はルーシーの血を吸い吸血鬼とし、ミナに自分の血を吸わせて吸血鬼にしようとする。女の血の中に吸血鬼の血が交じることで、ドラキュラの血族がふえるのである。これは、女が媒介となって交わった男たちに、さらに産んだ子供にドラキュラの血を伝えていくと拡張解釈すべきことなのか。汚れた血は接触感染の業病として遺伝のように伝えられるのか。ここに、「純血種」という幻想を脅かす異族間・異種間交配への恐怖を読み取ることもできるだろう。

II. Endemic/Epidemic

死はどこで始まりどこで終わるのだろうか。フォークロアの吸血鬼信仰や吸血鬼伝説に関する資料を読むと、そこに僻地の村落共同体の死生観、屍体処理、埋葬方法、土俗的信仰とキリスト教の教義の野合などの背景が見えてくる。⁸⁾フォークロアでは、殺人の被害者、いきだおれ、自殺者、悪疫に斃れた者など、不慮の死をとげた人々や通常の埋葬儀式の恩恵にあずかれなかった人々が、吸血鬼となって墓から蘇り近親者に「悪さ」をするとされている。死因を探る手立てもなく、病魔信仰にとらわれていた村人は、こうした屍を河や沼や山に遺棄するか、簡単な土葬で処理した。屍体が土の中でどのように腐敗し解体していくのか、彼らには理解しようもなかった。脳死や心臓死で死が完了するわけではない。屍体の解体作業が土中で完了するには、土壌や気候や湿度といった要素も関わっている。今日行われているような火葬が可能となったのは、ようやく十九世紀後半になってからのことである。⁹⁾それに、キリスト教は異教祭儀につながる火葬を禁止していた。また、キリスト教の教義では、死者は蘇ることになっていた。最後の審判も待たずに、ラザロもキリストも蘇ったではないか。浅く掘った土の中に埋めた屍体を野良犬が人目のないときに掘り起こしたのを、朝になって村人が見つけて伝説の吸血鬼の仕業だと解釈したところで、それを一笑に付すことはできない。彼らは伝承と信仰という名の迷信に生きていたが、文学上の吸血鬼（ブルジョワジーの嫌悪と嫉妬の的たる、貴族出の放蕩者・誘惑者タイプ）には無縁である。死者はおとなしく墓の中で眠っていてほしい、生者に迷惑をかけない

でほしい。ここには実在のワラキア公ヴラド・ツェペシュの影も形もない。村落共同体が死者の蘇りや病魔＝死神の跳梁、つまるところ死の汚染を防止する代表的な方法は、屍体損壊である。つまり、墓を暴き、屍体の首を切断したり、心臓を抜き取ったり杭を打ち込んだり、四肢を切断して歩行不能とするのである。ここでも、脳や心臓を生の核心、生の本質と彼らが考えていたのはいかにも興味深い。

死は伝染する、とりわけ家族の成員が続けて何人も死んだり、悪疫が村落共同体をほとんど壊滅状態に追い込むとき、死の伝染性という恐怖から遁れられるものではない。死は人間の想像力によって人格化されることになる。ヨーロッパ辺境における吸血鬼の跳梁という事件が西ヨーロッパの先進諸国に報道されたのは十八世紀初頭である。それは東ヨーロッパやバルカンにペストその他の悪疫が流行した時期にあたり、吸血鬼現象に興味をもつ啓蒙主義の知識人たちは、吸血鬼現象とペスト猖獗を類推的に結びつけたという。¹⁰⁾ そのかぎりでは、西側知識人はこの両者を辺境の風土病と片付けることもできたろう。ペスト猖獗の歴史はローマ時代にすでにその記録が残っているとはいえ、世界的な規模で波状攻撃をかけてくるのは、中世末期から近世にかけてである。つまり、十字軍遠征、戦争、内乱といった大規模な人間と物資両面にわたる移動・交換・交流の時代、さらにバルト海・北海貿易、地中海貿易の拡張、ついで大航海時代の海路による新旧両大陸間の交易と交流の時代である。人間が陸路であれ海路であれ空路であれ移動すれば、同時に物資も、さらにはさまざまな伝染病も広がるだろう。¹¹⁾ これが、政治的・経済的・文化的交流の一面なのだ。かつて風土病であった感染症も、交通網の発達した時代であれば、世界的に蔓延する可能性もある。人間という種は世界中の至るところにばらまかれているからだ。

ペストは何よりもその感染率と死亡率の高さ、症状の悲惨さから恐怖的となるが、梅毒はちょうど今日のエイズと同様に、そのイメージ形成に性交渉があずかる。¹²⁾ 一般には、梅毒の歴史は、もともとアメリカ大陸ないしハイチ島にあった病気を、十五世紀末、クリストバル・コロンの一行がヨーロッパに運びこんだことに始まるとされる。¹³⁾ 梅毒は新大陸発見とともに発見者を媒介として旧大陸全土に蔓延し、彼らの凱旋に聖痕を刻みつけた。クリストバル・コロンは自分の名、つまりキリストとコロニーの組合せを誇っていたという。コロンのアメリカ発見の後、ヴァスコ・ダ・ガマの東航により梅毒はインドに上陸し、ついで広東にも伝わった。イギリス文学ではエリザベ

ス朝・ジェイムズ朝演劇において、しばしばこの「フランス病」への言及に出くわすことになるだろう。さらに言いさえれば、ブラム・ストーカーは梅毒によって死んだと言われている。

十九世紀後半に細菌学が勃興し、複合顕微鏡の精密化とあいまって、伝染病の原因となる細菌や原生動物がつきつきと発見されていった。十九世紀の最後のほぼ二十年間に、破傷風菌、淋菌、マラリア病原体、チフス菌、結核菌、コレラ菌、連鎖状球菌、ジフテリア菌、髄膜炎菌、ペスト菌、赤痢菌が発見された。梅毒の病原体としてスピロヘータ・パリーダが発見されたのは、1905年のことである。¹⁴⁾ こうして、体液説や生氣論は滅び、感染症などに代表される特定病因説が広まり、信じられるようになる。症状から病因を特定でき、しかも予防、対抗、治癒の手段がとれるのだ。

十八世紀の科学革命以降、医学が科学の一部門として専門化し、哲学から離れ、十九世紀にますます世俗的な権威をもつようになる。かつてヨーロッパ精神文化を支配していたキリスト教神学の衰退とともに、医学は従来宗教の占めていた位置にとってかわるようになった。というよりも、医学が神学イデオロギーとして復権したというべきだろう。古来より、医師は薬師であるとともに呪術師でもあった。病や死は神あるいは悪魔の仕業と考えられていたので、神に祈ったり悪魔祓いの儀式を執りおこなった。医師は魂と肉の双方に関わる権威ある専門職、いわば祭司でもあったのだ。医学は宗教・祭祀の一部門から、ギリシア時代以降ではむしろ哲学に包摂されたが、臨床医学の誕生とあいまって世俗世界における魂の救済者となる。罹病には罪という原因ではないにしろ必ず特定の病因があるはずだ。この病因を特定し根絶すれば、健康になれるだろう。これは神学イデオロギーの医学ヴァージョンである。教会と信徒の関係が、医師と患者の関係に類推的に転置され、肉体の健康は魂の救済と同様に達成されねばならぬ義務、強迫観念と化す。医師という人物形象は、十九世紀イギリス小説においてブロンテの『ヴィレット』でもディケンズの『荒涼館』でも仕事熱心な人物として好意的に描かれているが、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』ともなると、この新たな高級専門職と伝統社会との齟齬・対立が明白になる。医師の社会的評価が高まるにつれ、共同体内部の従来の支配階層との緊張がますますのたむ。『ミドルマーチ』の医師リドゲイトは、選挙法改正以前のイギリスの田園都市で医療の改良を試みるが周囲の人々の反発を買い、物語の最後ではロンドンに移住する。世紀末の小説『ドラキュラ』では、イギリスでおこる奇怪な事件の鍵は、

ドラキュラという名のヨーロッパ辺境に起源をもつ病である。ドラキュラは世紀末版悪魔としてイギリスの港と首都に跳梁する。とはいえ、はっきりとドラキュラと伝染性の吸血行為が結ばれるのは、ルーシーの肉体、ついでミナの肉体においてである。ドラキュラは、彼の城に監禁したジョナサンの血を吸う気配はなかった。ジョナサンを襲おうとしたのは、ドラキュラによって吸血鬼と化した淫蕩な三人の女であったが、あわやというところでドラキュラ自身が女たちを制止し、楽しみを後に延期するようにと助言する。勿論、ここでジョナサンに死なれてはプロットが先に進まないという都合もあるだろうが、この小説にはあからさまな同性のエロティシズムを回避・隠蔽しようとする傾向があるのはたしかである。¹⁵⁾ドラキュラが箱に身を隠して「デメテル」に乗り込みホイットビーに到着するまで、彼は船員の血を吸って生き延びていたはずなのに、船長の残した航海日誌に読み取れるのは、この世ならぬ存在を見てしまった者たちの恐怖と絶望である。死んだ船員や船長が吸血鬼になって蘇り、イギリスに「吸血病」なる伝染病を蔓延させたという暗示はそこに見出せない。

ドラキュラはあくまで汚れを知らぬ若く美しい女を狙う。吸血鬼と化した女は生前とはうってかわって淫乱になる。あたかも女には聖女と娼婦の二種類しかないように、また彼女の潜在的淫蕩さが、性交にも似た吸血行為によって顕在化するとでもいうように。男を墮落させ子々孫々まで汚れた血を伝えていくのは許しがたき罪であり、人類のために滅ぼされねばならぬとはまた伝統的な女性嫌悪である（実は吸血行為は、性交渉も生殖活動も無意味と化す栄養摂取・吸収・繁殖活動なのであるが、ここでは吸血行為を隠喩的に性交渉に見たてている）。ルーシーは吸血鬼となって後、墓から出て子供の血を吸おうとし（母性神話への冒瀆である）、その現場を尾行していたヴァン・ヘルシングとセワードに目撃される。ついで彼女を撲滅するため、棺の中で眠っている彼女の心臓に彼女の婚約者アーサー・ホルムウッド（ゴルダミング卿）が杭を打ち込もうとするとき、彼女は両手をひろげその濡れた赤い唇に尖った白い歯を光らせて彼を誘惑する。性的な磁力を発する彼女に恐怖と嫌悪しかもよおさないアーサーは怯むことなく杭を打ち込み、彼女はキリスト教徒にふさわしい死を迎える。その顔には生前の清純な美しさが蘇るのだ。この情景をアーサーとともに見守るのは、かつて同じ日に彼より先んじてルーシーに求婚した二人の男、つまり精神科医セワードと、アーサーの友人でありウィンチェスター銃の名手たるアメリカ人モリス、それから反ドラキュラ

十字軍の盟主たるヴァン・ヘルシングである。彼らは最早吸血鬼の存在を疑うことはできなくなる。この四人の男はまた、ルーシーが吸血鬼化する以前原因不明の病（実は「吸血病」）で床にふせっていた頃、彼女の肉体から血液が減少しているのにヴァン・ヘルシングが気づき、輸血で対処することになったとき、躊躇なく血液を提供した男たちでもあった。血管への直接輸血はハーヴェイの血液循環説（1628年）以降のことであるが、今日知られているA B O血液型が抗体・抗原の同定とともに発見されたのは1901年である。ヴァン・ヘルシングが誰よりもまずアーサーに血液の提供を願い出るのは、アーサーが貴族の血統でありルーシーの婚約者でありしかも若く強いという理由からである。ヴァン・ヘルシングはかつての教え子セワードに語る。‘He is so young and strong and of blood so pure that we need not defibrinate it.’ (p. 122) と。ヴァン・ヘルシングは血液型のことなど気にしていない。ルーシーを愛する男たちにこそ、血を提供する資格がある。しかし、輸血しても夜毎ルーシーの喉からドラキュラは血を吸い取り、彼女は衰弱して死ぬ。申命記以来の「血は命なり」という信仰は、教会の権威が失墜しつつある（だが医学の権威は高まりつつある）世紀末でもゆるがない。彼女の死後、輸血の隠喩的意味をめぐるセワードとヴァン・ヘルシングの会話は興味深い。

‘...Said he [Arthur] not that the transfusion of his blood to her veins had made her truly his bride?’

‘Yes, and it was a sweet and comforting idea for him.’

‘Quite so. But there was a difficulty, friend John. If so that, then what about the others? Ho, ho! Then this so sweet maid is a polyandrist, and me, with my poor wife dead to me, but alive by Church’s law, though no wits, all gone—even I, who am faithful husband to this now-no-wife, am bigamist.’ (p. 176)

アーサーは自分の血がルーシーの血管に循環することで彼女を花嫁にしたと考え、同じ論法によってヴァン・ヘルシングは重婚を犯したことになる。同じ論法で、セワードとモリスの提供した血液がルーシーの体内にあるからには、ルーシーは姦通罪を犯したことになるだろう。輸血は結婚に読み換えられ、したがってルーシーは娼婦あるいは輪姦の犠牲者と解釈されることにも

なる。すると、ルーシーの死の時点では、ドラキュラは少なくとも一人の女と四人の男の血を摂取し汚染していることになる。

ドラキュラが二番目に狙う女は、ルーシーの親友でありジョナサンの妻でもあるミナである。ヴァン・ヘルシングは、ルーシーの死後ミナと接触し、彼女の助力を得てドラキュラ退治を実行に移すべく対策を練る。彼らはデータの「藪の中」に迷いはしない。すべての「徴候」も「証拠」物件も、その起源に神と悪魔の闘いが示されていると解釈される。彼女は入手した情報・資料・文書・記録・手稿を時間系列に沿ってタイプライターで転写し討伐隊の人数分だけタイプ原稿をカーボン・コピーし、会議では秘書も務める。ヴァン・ヘルシングはミナを手放して褒めちぎる。'She is one of God's women fashioned by His own hand to show us men and other women that there is a heaven where we can enter, and that its light can be here on earth.' (p. 188) と。さらに、彼はミナが女らしい繊細な性格にくわえて卓越した記憶力をも保持していることから、「男の頭」と「女の心」の双方を備えていると褒める。言うまでもなく、ジョン・ラスキンの『胡麻と百合』で表明される男らしさ／女らしさの価値観が支配的な社会にあって、ミナは欠陥品と見做されかねない。¹⁶⁾彼女が男の「本質」を定義する明晰な頭脳をもっているにせよ、肉体は女なのだ。騎士道精神に燃える五人の男たち（ルーシーに血を提供した四人と、ミナの夫ジョナサン）は、ミナの不服にもかかわらず、彼女を反ドラキュラ十字軍の東方遠征から外そうとする。かよわい女が悪魔公との血腥い戦争に加わるべきではないし、女は男の闘いの足手纏いにしかならない。こうした配慮を、ミナも不承不承受け容れる。彼らは男女の役割や結婚に関してルーシーとほぼ同意見なのである。'I suppose that we women are such cowards that we think a man will save us from fears, and we marry him.' (p. 57) 文明国の男らしい男は女らしい女を支え保護してあげなければならない。不安を与えかねない情報から遠ざけねばならない。排除は弱者保護という名目をもつ。だが、この男らしい思いやりが裏目にでることを、ヴァン・ヘルシングは間もなく思い知る。ドラキュラはまんまとミナを襲うからである。

With his left hand he held both Mrs Harker's hands, keeping them away with her arms at full tension; his right hand gripped her by the back of the neck, forcing her face down on his bosom.

Her white nightdress was smeared with blood, and a thin stream trickled down the man's bare breast, which was shown by his torn-open dress. The attitude of the two had a terrible resemblance to a child forcing a kitten's nose into a saucer of milk to compel it to drink. (p. 282)

日記にこの情景を書きつけるセワードは、ドラキュラとミナ二人のとりポーズに、子供が猫にミルクをむりやり飲ませる場面を連想する。批評家たちは、このポーズに隠された強制行為を読み取る。オーラル・セックスである。¹⁷⁾ドラキュラが自分の血（少なくとも五人の血液が混じった「吸血病」の病原菌コロニー）をミナに強要するこの体勢を、子供／猫ではなく男／女に読み換え、ミルクではなく精液に読み換えるのである。血液／精液／乳は特権的な生命活動（生殖・再生産・栄養摂取）の布置を構成する。¹⁸⁾小説『ドラキュラ』における血のレトリックは巧妙である。引用箇所をオーラル・セックスと解釈すれば、この小説がわれわれにおしつけるブルジョワ価値観、性道徳における、ドラキュラの怪物性が際立つ。ミナは貞淑な人妻であり、この行為は生殖に結びつかないがゆえに「不自然」なのである。ミナはドラキュラの血を飲まされて自分もまた吸血鬼と化す恐怖に襲われ、「発病」したらひと思いに殺してほしいと健気にも懇願する。敬虔なキリスト教徒ミナの額には、かつてヴァン・ヘルシングがドラキュラの額に聖餅でつけたのと同じ烙印が捺される。それは永遠に神に見放された者の呪いの徴である。ミナがはからずも仇敵と通じてしまったことで、十字軍の騎士たちはますますドラキュラ族殲滅への熱望に駆られる。しかもヴァン・ヘルシングは、ドラキュラの血が体内に流れるミナに催眠術をかけてドラキュラの居所や動向を探ろうとする。敵と通じた女は媒体として男たちの結束固めに役立ち、反ドラキュラ運動は、一種の擬似家族の名誉をかけての聖なるプロジェクトとなる。また彼女を間諜としても利用できる。

小説の最後で、ドラキュラは自分の根城でジョナサンとモリスのふりおろすナイフを喉と心臓にうけてあっけなく塵と消える。三フィートの杭で心臓を貫通されるわけでもなく、首を切断されるわけでもない。ドラキュラの滅亡とともに、ミナの額に刻みつけられた徴も消える。この闘いでモリスは死ぬ。一年後、ジョナサンとミナ夫婦に息子が生まれる。

It is an added joy to Mina and to me that our boy's birthday is the same day as that on which Quincey Morris died. His mother holds, I know, the secret belief that some of our brave friend's spirit has passed into him. His bundle of names links all our little band of men together; but we call him Quincey. (p. 378)

『ドラキュラ』における血のレトリックでは、ドラキュラの滅びとともに、ミナの額の徴が消え失せ、したがって彼女の体内の汚染されていた血液も浄められたことになる。彼女は人間として蘇ったのである。今や彼女の血管に流れているのは、ルーシー、アーサー、セワード、ヴァン・ヘルシング、モリス、そして彼女自身、これら少なくとも六人の欧米先進国の白人の汚れなき血液の混淆である。血は命なれば、血液は容易に精液に読み換えられる。彼女はジョナサンによって懐胎し出産する。なるほど、ここには一夫一婦制を脅かす要素は皆無であるが、生まれた子供は、反ドラキュラ十字軍の契機となった異種族との邂逅、文化交流、流血の産物である。神の加護なくば勝算もなかった（と彼らが信じる）この聖戦に参加した英雄たちの名がすべて、息子において登録される。父と子と聖霊の名において祝福されるべき擬似一族、ここにひとつの円環が閉じる。

この世紀末の十字軍は全ヨーロッパを巻き込む運動にはならない。世紀末の騎士たちはドラキュラの実在とそれが及ぼすありうべき惨禍を、情報メディアを通じて広く国民に警告しようとはしない。彼らのドラキュラ・ハンティングは、イギリス貴族（アーサー）、法律（ジョナサン）、医学（セワード、ヴァン・ヘルシング）、資本（モリス）の信用性と安全性ゆえに、民間人にも当局にも怪しまれず完遂される。彼らは吸血鬼の伝染性を恐怖するが、悪魔の存在を（したがって神の存在を）関係者以外に訴えかけはしない。指導者ヴァン・ヘルシングは、十九世紀末のヨーロッパ先進国に起こった怪奇事件を解決しようとして、マニ教的二元論をヨーロッパの辺境に適用する。¹⁰そこでなら、中世の神学イデオロギーも活躍の場を見出せるだろう。大英帝国の小説読者にとって、東ヨーロッパやバルカンは地理的にも歴史的にも遠い魔法の国である。しかし、レ・ファニュ、ストーカー、オスカー・ワイルドらが生まれた国、ブリテン島のすぐ西の島では、信仰宗教ではとても割り切れぬ自治・独立運動が何百年も続けられていた。

註

- 1) テクストは, Bram Stoker, *Dracula* (1897; Oxford and New York: Oxford University Press, 1983) に拠り, 引用箇所を括弧内に頁数で示す。
- 2) 以下の著書を参考にした。レイモンド・T・マクナリー, ラドゥ・フロレスク『ドラキュラ伝説 吸血鬼のふるさとをたずねて』, 矢野浩三郎訳, 角川書店, 1978年。ニコラエ・ストイチェスク『ドラキュラ伯爵 ルーマニアにおける正しい史伝』, 鈴木四郎, 鈴木学 訳, 中央公論社, 1988年。Clive Leatherdale, *The Origins of Dracula* (London:William Kimber, 1987).
- 3) Leatherdale, p. 86.
- 4) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 『世界の名著50』, 梶山力 他訳, 中央公論社, 1975年。Ian Watt, *The Rise of the Novel* (London:Chatto and Windus, 1957).
- 5) 十九世紀後半に犯罪小説, 探偵小説, ミステリー小説が大衆的ジャンルとなる。イギリスでは産業革命以降, 農村から都市へと人口が流入し, 労働者階級を形成するとともに, 社会問題は都市中心となる。都市は失業者や娼婦を大量にかかえこむことになり, 公衆衛生革命が始まる。迷宮入りとなる異常な事件はむしろ都会で起こる。1888年にロンドンを震撼させた連続娼婦殺人事件のほうが『ジキルとハイド』や『ドラキュラ』よりもはるかに当時の先進ヨーロッパ社会の世相を反映している。犠牲者は娼婦, 下手人は自称「切り裂きジャック」であるが, 事件がイースト・エンドで起こったことから, 彼のイメージは東ヨーロッパから移民したユダヤ系の労働者として作られた。娼婦もユダヤ人も, 梅毒の典型的な保菌者としてイメージ化される。Sander L. Gilman, *Sexuality: An Illustrated History* (New York: John Wiley & Sons, 1989), pp. 231-61. 都市問題のひとつに数えられるべき公衆衛生革命については, アラン・コルバンの著書が参考になる。Alain Corbin, *Les Filles de nocé: Misère sexuelle et prostitution, 19^e et 20^e siècles* (Paris, 1978), *Le Miasme et la jonquille: L'Odorat et l'imaginaire social, XVIII^e -XIX^e siècles*, (Paris, 1982).
- 6) したがって, 写真技術(ダゲレオタイプ, カロタイプ)と映画技術(エディソンのキネトスコープ, リュミエール兄弟のシネマトグラフ)への言及がこの小説のなかに見当たらないことが, むしろ不思議に思える。
- 7) Cf. Anne Cranny-Francis, 'Sexual Politics and Political Repression in Bram Stoker's *Dracula*,' in *Nineteenth Century Suspense*, ed.

Clive Bloom et al (London:Macmillan, 1988), pp. 74-76; John Allen Stevenson, 'A Vampire in the Mirror: The Sexuality of *Dracula*,' *PMLA* (March 1988), pp. 146-47.

- 8) 以下の著書を参考にした。Paul Barber, *Vampires, Burial, and Death: Folklore and Reality* (New Haven and London: Yale University Press, 1988). 栗原成郎『スラブ吸血鬼伝説考』, 河出書房新社, 1991年。
- 9) Barber, pp. 75-78, pp. 167-68; Leonard de Vries, *Victorian Inventions* (London: John Murray, 1991), pp. 150-51.
- 10) 栗原, p. 145.
- 11) アメリカ大陸発見後, 征服者が原住民にもたらした伝染病の惨禍については, トドロフの著書を参照。ツヴェタン・トドロフ『他者の記号学』, 及川馥 他訳, 法政大学出版局, 1986年。免疫のないインディオたちの大量死を, スペイン人たちは神罰と解釈した。
- 12) 都市/田園という二項対立に基づいて, 梅毒を人口周密都市に住むふしだらな男女の不純交遊の結果であると考えがちな学者たちは, ロシアの素朴な片田舎に梅毒の患者を多く見かけ戸惑ったという。Laura Engelstein, 'Morality and the Wooden Spoon: Russian Doctors View Syphilis, Social Class, and Sexual Behavior, 1980-1905,' in *The Making of the Modern Body*, ed. Catherine Gallagher and Thomas Laqueur (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1987).
- 13) 小川鼎三『医学の歴史』, 中央公論社, 1964年, pp. 201-3. Engelstein, p.171.
- 14) 以下の著書を参考にした。小川, 前掲書。G・R・テイラー『生物学の歴史』全二巻, 矢部一郎 他訳, みすず書房, 1976-77年。三輪史朗『血液の話』, 中央公論社, 1988年。
- 15) したがって, 『ドラキュラ』は男女のセクシュアリティ, 家父長制度の支配と抑圧, この制度の不自然さと基盤の危うさ, 去勢恐怖, 世紀末「ニュー・ウーマン」問題といった観点から論じられることが多い。Cf. Alan P. Johnson, "'Dual Life": The Status of Women in Stoker's *Dracula*,' in *Sexuality and Victorian Literature*, ed. Don Richard Cox (Knoxville: University of Tennessee Press, 1984); Cranny-Francis, 'Sexual Politics and Political Repression,' and Philip Martin, 'The Vampire in the Looking-Glass,' in *Nineteenth-Century Suspense*; Christopher Craft, "'Kiss Me with Those Red Lips": Gender and Inversion in Bram

- Stoker's *Dracula*,' in *Speaking of Gender*, ed. Elaine Showalter (New York and London: Routledge, 1989).
- 16) Cf. Elaine Showalter, *The Female Malady* (Harmondsworth: Penguin, 1987); Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1989); Marina Benjamin ed., *Science and Sensibility* (Oxford: Basil Blackwell, 1991).
- 17) James B. Twitchell, *The Living Dead* (Durham, N. C.: Duke University Press, 1981), pp. 137-38. なお註15) も参照。
- 18) Laqueur, 'Orgasm, Generation, and the Politics of Reproductive Biology,' in *The Making of the Modern Body*, pp. 8-33.
- 19) Roger Dadoun, 'Fetishism in the Horror Film,' in *Fantasy and the Cinema*, ed. James Donald (London: British Film Institute, 1989), p. 49.

* 本稿は、平成三年度文部省科学研究費奨励研究 (A) の成果の一部である。